テオグニスとニーチェ

小野寺

郷

文を発表した。
文を発表した。 テオグニスについて」という論文をラテン語で書いた。その後もテ 書き、一八六七年には古典文献学の専門雑誌である「ライニシェス・ オグニス研究を続けて、同じ一八六四年には「テオグニス研究」を ニーチェはギムナジウムの卒業に際して一八六四年に「メガラの

はごく自然なことであろう。 ら、ニーチェがテオグニスから何等かの影響を受けたと推測するの このように、若い頃に継続的にテオグニスを研究したのであるか

の誕生』の有名な一節にこの様な話がある。ミダース王はシーレー していたが強制されてとうとうミダース王に以下のように語ったと が最善で最良であるかを尋ねた。シーレーノスは最初は頑固に沈黙 ノスを長い間追いかけた末にようやく捕らえらて、人間にとって何 その影響として頻繁に言及されるのがペシミズムである。『悲劇

Ι

たこと、存在しないこと、無であることだ。だがお前にとっ お前に最善なことは全く無理だ。それは生まれて来なかっ

テオグニスの四二五ー四二八行に見られるものと共通であり、 たしかにこのシーレーノスの言葉のペシミスティックな内容は下の て次善なのはすぐに死ぬことだ。

テオグニスの影響を思わせる。

地上の者どもにとって何よりも善いのは、

生まれて来ない

一見

こと

鋭い太陽の光をおがむこともなく。

生まれてしまったらなるべく早くハーデース(冥界)の門

をくぐること

そして多くの土で塚を築き横たわること。

持ちながら古代ギリシャの文献の到る所に見いだされるのである。(キ) だというこのペシミスティックな文句は幾らかのバリエーションを しかし実は、最善なのは生まれないことで次善なのは早く死ぬこと

テオグニスとニーチェ

シミズムは古代ギリシャー般ないし『エウデーモス』断片の影響で リシャに於てかなり一般的だったペシミズムが『エウデーモス』断 る。 尋ねたが、セイレーノスは最初は頑固に沈黙していたものの強制さ ダース王がセイレーノス(シーレーノスに同じ)を長い間追いかけ そこにはシーレーノスもミダースも登場しない。それらが言及され くとも現存しているテクストでは)一つの詩の全体なのであるが、 引用されている訳でないのは上の二つのテクストを見比べてみれば うに思われる。さらにテオグニスの詩がそのまま『悲劇の誕生』に ニスの四二五ー四二八行でも用いられていると考える方が妥当なよ スだという訳ではなさそうであり、むしろよく知られた諺がテオグ が、永年に渉って人々の口から口へ伝えられている」(宮内璋・松 モス』断片に於て、この様な文句について「あの人口に膾炙せる諺 片を典拠として表明されているのであるから、『悲劇の誕生』のペ いことで次善なのは早く死ぬことだと語ったと言われているのであ れてとうとうミダース王に、人間にとって最善なのは生まれて来な た末にようやく捕らえて、人間にとって何が最善で最良であるかを ているのは上にその一部分を引用した、プルータルコスの『倫理論 一目瞭然である。またテオグニスの詩は上に引用した四行が またプルータルコスが引用しているアリストテレースの『エウデー そこでは『悲劇の誕生』の問題の箇所とほとんど同じ様に、ミ の中にあるアリストテレースの『エウデーモス』断片なのであ つまり『悲劇の誕生』の問題の箇所の典拠はテオグニスではな アリストテレースの『エウデーモス』断片なのである。古代ギ 訳)と言われているので、その多くの箇所の典拠がテオグニ (少な

> は思えない。 あると言うべきであって、テオグニスの影響だと言うのは適切だと

I

ペシミズム以外にテオグニスの影響としてもう一つ挙げられている。 このは貴族主義と、それと表裏一体をなしている 大衆ない。例えば『悦ばしき知識』では「というのは大衆は根本的にあ ちゆる種類の奴隷奉仕を喜んでするものだからである」と述べられ ちゆる種類の奴隷奉仕を喜んでするものだからである」と述べられ たいる。このような貴族主義と賎民蔑視はテオグニスにも見いださ れる。以下のテオグニス八四七−八五○行が同じ思想を示している れる。以下のテオグニス八四七−八五○行が同じ思想を示している と述べられ でいる。以下のテオグニス八四七−八五○行が同じ思想を示している ない。段えば『悦ばしき知識』では「というのは大衆ないし賎民を と述べられ でいる。 ことは容易に見て取れるであろう。

これほど主人を愛する民衆をお前は他に見つけはしないだ太陽が見おろす限りの人間の中で突き棒で打て、そして首に重い軛の輪をはめろ。頭のからっぽな民衆を足で踏みつけろ、鋭い

訳)というテオグニスの文句を『ツァラトゥストラ』への序言としおまえが持っている気位までも失ってしまうだろう」(川原栄峰は貴族的なことを学ぶが、もしもおまえが下賎の徒にまじわると、主張されてきた。例えばフレンツェルは「貴族的な人からはおまえして、ニーチェがテオグニスから影響を受けたのであるとしばしばしだ、ニーチェがテオグニスから影響を受けたのであるとしばしば貴族主義と賎民蔑視がこの様に両者に共通している事のみを根拠と

ている。「10 る。テオグニスがこの点でニーチェに影響を与えたことを証明する 観念であって、なにもテオグニスに限られたものではないからであ なかった。というのは上記の様な貴族主義と賎民蔑視は貴族階級な チェの主人道徳と奴隷道徳の原形をテオグニスの詩の中に見いだし て解釈できるとまで述べている。またカリエールやナイトはニー すもっと具体的な証拠を提示しなければならない。はたしてそのよ いしそれに類する階級が存在する所ではどこでもよく見いだされる 単に思想的な類似を示すだけでなく、 しかしそのような主張は今まで十分な説得力を持ってはい 両者の結び付きを示

Ш

うな証拠は存するのだろうか。

テオグニス九五九一九六二行に以下のような詩がある。 私が一人で黒い水の泉から飲んでいた間は

水は私には甘くて美しく思えた。

他の泉か河から飲むとしよう。 だが今は既に濁ってしまった、水は土と混ざっている。

たのだが (九五九-九六〇行)、誰か他の者がやって来て水を濁ら る 泉を濁らせた者に対する怒りと嫌悪を感じさせるが、それだけでな 河へ飲み水をもとめて去って行くのである(九六二行)。この詩は せて飲めなくしてしまった(九六一行)。それで「私」は他の泉か 寂しさと哀感をたたえるこの四行の詩では泉がモチーフになってい ' その泉の水は自分以外の者がいなかった時にはきれいで甘かっ なすすべもなく追い払われるように立ち去らざるを得ない自分

> いるのである。 て」という箇所では生が泉にたとえられて以下のように述べられて の無力さに由来する哀しみをも感じさせるのである。 ところがニーチェの『ツァラトゥストラ』第二部の「賎民につい

は、全ての泉が毒されている。…… そして生に背を向けた多くの者は、ただ賎民に背を 彼らは神聖な水に情欲で毒を盛った。…… 生は快楽の泉である。だが賎民も共に飲むところで

向けたのだ。

なかったのだ。…… ……もはや賎民が泉のほとりに座っていない高みに¹C その者は泉と炎と果実を賎民と共有することを望ま

どうやって私は飛んできたのか?……

……まことに、快楽の泉を再び見つけるために、

私

は最も高い所へと飛ばねばならなかった

おお、同胞よ、私はそれを見つけた!ここ最も高い

所に快楽の泉が私のために湧いている!そして賎民が

緒に飲むことのない生があるのだ。

て来たと述べられている。Aが先ほどのテオグニスの詩の九五九ー て行ったと言われ、さらにCで「私」が他の新たな清らかな泉にやっ ここでは、まずAで賎民が泉の神聖な水に毒を盛ったと述べられ、 つぎにBで賎民に毒を盛られた泉を嫌って多くの者がその泉を去っ

成となっている。Cは直接には対応していないが、「私」も泉を去っ 九六一行に対応し、Bが泉を去るという点で九六二行に対応する構

そして泉を汚す者に対するあからさまな嫌悪が双方の根底に横た て前出のテオグニスの詩に対応している事が見て取れるのである。 点では上記のテオグニスの詩とは異なっているが、全体的構成に於 清らかな泉を発見した喜びにあふれた晴やかな色調のもので、その していると見なすことができるだろう。「賎民について」は新しい たということが示唆されているのだから、おおよそ九六二行に対応

わっているのである。

ろう。 二部に於てその影響が見いだされるのであるから、この影響は単に えるべきであろう。テオグニスに関する論文を書いたのはニーチェ グニスのテクストを念頭に置きつつ「賎民について」を書いたと考 を置こうとする賎民蔑視の思想を読み取り、それに共感して、テオ が随分と若い頃であったが、一八八三年の『ツァラトゥストラ』第 から、この対応関係が偶然の一致であると考えることはできないだ る論文を書いており、テオグニスには十分に精通していたのである 時的なものではなく根深いものであったと言えるだろう。 さて冒頭で述べたようにニーチェは合計三つのテオグニスに関す むしろニーチェはテオグニスの上記の詩に賎民を嫌って距離

ĪV

う述べられている。「2」 また一八八五年のある断片ではテオグニスの名前が言及されてこ

言うように、「順応する」ことを心得ている。それによっ て彼らは、テオグニスが歌っているようにそれがくっつい ユダヤ人の精神の危険は1)……2)彼らは、科学者が

> らの俳優となった。……まったく些細な儲のために多くの 精神と不変性を犠牲にするという習慣は、彼らの特性に宿 ている岩から色彩を借用する蛸と同じように、生まれなが

ここではユダヤ人は環境に非常にうまく適応するのだが、 命的な跡を残した。 その際

られているのだが、ここでは以下のテオグニスの詩の二一三一二一 演じると言われ、そのために「精神と不変性」を犠牲にすると述べ に、「生まれながらの俳優」のように自己の本質とは異なるものを

八行が言及されているのである。 心よ、友人たち皆にならって変わりやすい性質へ向かうの

誰もが持っている性質に混ざりながら。

ずる賢い蛸の性質を持て。 くっついている岩と外観が同じようになる、

時によってこのように振舞ったり、他の色になったりしろ。 たしかにずる賢さは節操よりも優っているのだ。

対比されて反語的に非難されているのが窺われる。ところで節操と るのを断念する際の痛切な悔しさや挫折感や諦念をこの詩は伝えて が、やむを得ない所まで追い詰められて、とうとう自己の節操を守 かわらず、ただ一人自己の節操を忠実に守り通していたテオグニス は皆早めに節操を捨てて政情の変化に如才なく適応していたにもか しい立場に追い込まれたであろう。その苦境のなかで貴族の友人達 民衆が政権を握った後に、反民衆の立場に立っていた貴族たちは苦 いる。ここでは蛸のような変わり身の巧みさは節操という不変性と

に於けるテオグニスへの言及はそのような共感を示している。に於けるテオグニスへの言及はそのようと思われる。この断片の詩に、ニーチェは大いに共感したである。それゆえに、自己に忠実ら隔たっていることを意味するのと同じことだということが察せられる。ところで「大衆に属したくない人は自分に安易であるのをやめる。ところで「大衆に属したくない人は自分に安易であるのをやめる。ところで「大衆に属したくない人は自分に安易であるのをやめる。ところで「大衆に属したくなった際の強い悲嘆をたたえたこにあくまでも賎民から隔たっていようと努めてきたテオグニスがとにあくまでも関民に近付かざるを得なくなった際の強い悲嘆をたたえたこの詩に、ニーチェは大いに共感したであろうと思われる。この断片の詩に、ニーチェは大いに共感したであろうと思われる。この断片の詩に、ニーチェは大いに共感したであろうと思われる。この断片の詩に、ニーチェは大いに共感したであろうと思われる。この断片の詩に、ニーチェは大いに共感したであろうと思われる。この断片の詩に、ニーチェは大いに共感したであるうと思われる。この断片の詩に、ニーチェは大いに大いる。

٦

う(≧) ではこう述べられていつつある事に対する強い危機感を挙げることができるだろう。『ツァつつある事に対する強い危機感を挙げることができるだろう。『ツァが政治や文化などの様々な領域で支配的な地位に立つ時代が到来して、天才グニスとニーチェに共通する際だった特徴として、賎民

と自称していようとも。飼いのもとで暮らすほうがよい。―― たとえ彼らが「貴族」飼いのもとで暮らすほうがよい。―― たとえ彼らが「貴族」を飾りたてた賎民と共に暮らすよりも、むしろ隠者と山羊まことに、我々の、金メッキされた見せかけだけのうわべ

これを以下のテオグニスの詩の五三-五八行と見比べてみよう。

は竃)、 キユルノスよ、ポリスはまだあのポリスのままだが、人々

l ì

脇のすり減った山羊の皮を着て

彼らは以前には習わしも法律も知らず、

ポリユパオスの子よ、そして彼らは今は高貴なのだ。鹿のようにこのポリスの外に住んでいた。

以前

に高貴だった人々は

「王たちとの対話」では上辺だけをごまかした賎民が貴族と称して「王たちとの対話」では上辺だけをごまかした賎民が貴族と称していると嘆かれている。テオグニスでは以前にはポリスの外に住んでいが表明されている。テオグニスでは以前にはポリスの外に住んでいが表明されている。テオグニスでは以前にはポリスの外に住んでいが表明されている。テオグニスでは以前にはポリスの外に住んでいると嘆かれている。どちらでも残した。

それによって全てが不透明になりどんよりとする、始まりまた『善悪の彼岸』二八七では以下のように述べられている。『』が支配的な地位にあることが強く嘆かれているのである。

これを以下のテオグニスの六七一−六八○行と比較してみよう。つつある賎民支配のこの陰欝で垂れこめた空のもとで

ス島の海から遠くへと漂っている。 ……いま我々は白い帆を下へ降ろしたまま暗い夜にメーロ

奴らは水を汲み出そうとしないし、

奴らのやり口はこうだ。奴らは巧みに見張っていた優良ないる。全くのところ助かるのはとても難しい。

舵手をやめさせた。

海は両方の舷を洗って

な分け前はもはやなくなった。そして力尽くで積荷を奪い取り、秩序は失せて、皆に公平

支配しているのだ。 人夫どもが支配している、劣悪な奴らが優良な者を上から

たまっていく危機的な状況のなかで、優れた舵手(貴族の支配者)海を漂う船に喩えられていて、両舷が高い波に洗われて船底に水がとして描写されている。テオグニスの詩ではポリスが夜に荒れた外『善悪の彼岸』では始まりつつある賎民支配が重苦しく陰欝な雲天大波が船を呑込んでしまわないかと心配だ。……

がやめさせられて、賎民が積荷(他人の財産)を奪い取るような状

況が描かれて、ポリスのこれからの行く末が案じられている。どち

らでも賎民支配が悪い結果をもたらそうとしていることが切実に懸念されているのである。もちろんテオグニスの責族主義と賎民度は社会階層ではなく精神の高貴な者と低劣な者であるという違い民は社会階層ではなく精神の高貴な者と低劣な者であるという違い民は社会階層ではなく精神の高貴な者と低劣な者であるという違い民は社会階層ではなく精神の高貴な者と低劣な者であるという違い民は大だ低い階層に属するというだけではなく精神的にも劣悪な者なのである。もちろんテオグニスの責族主義と賎民度の中にニーチェが自らの貴族主義と賎民蔑視の中にニーチェが自らの貴族主義と民民政の原形を見いだすの視の中にニーチェが自らの貴族主義と民民政の原形を見いだすの視の中にニーチェが自らの貴族主義と民民政の原形を見いだすの視の中にニーチェが自らの貴族主義と民民政の原形を見いだすの視の中にニーチェが自らの貴族主義と民民政の原形を見いだすの視の中にニーチェが自らの貴族主義と

結論

もしれない。しかしそれは決して無視されてはならないと思われる。こスがニーチェに与えた影響は全体としては大きなものではないか的な思想がニーチェに影響を与えたことが明らかにされた。テオグ的な思想がニーチェに影響を与えたことが明らかにされた。テオグを機感が両者に共通しているという事実と、賎民支配に対する切迫したさて上で見たようにニーチェのテクストが二か所でテオグニスのさて上で見たようにニーチェのテクストが二か所でテオグニスの

注

- (1) Friedrich Nietzsche, Werke und Briefe, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Werke Bd. 3, hrsg. Hans Joachim Mette/Karl Schlechta, C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung. München 1935, S. 21-64, S. 69-75, S. 151-206.
-) David F Chartwright "Reversing Silenuns" Wisdom "Nietz.るので数え入れていない。は「メガラのテオグニスについて」の覚え書きであると思われ
- David E. Chartwright, "Reversing Silenuns' Wisdom,"Nietzsche Studien 20, 1991, S.311 u. Anm. 7
- A.H.J. Knight, Some Aspects of Life and Work of Nietzsche and particularly of his connection with Greek Literature and Thought, Cambridge 1933, S. 71.
- 己(い。 3)ニーチェのテクストは主として次のものを用いて KSA と略

Berlin/ New York 1988. KSA Bd. 1, S.35 Deutscher Taschenbuch Verlag/Walter de Gruyter, München in 15 Bänden, 2. Aufl. hrsg. Giorgio Colli/Mazzino Montinari Friedrich Nietzsche, Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe

4) Bacchylides V, 160

Certamen Homeri et Hesiodi 240 Rz. (425 et 427)

Cicero, Tuscul. I. 48, 114sq

Clemens Alexandrinus, Str. III, 15, 1

Diogenes Laertius X, 126 Plutarchus, Mor. (Consol. ad Apoll.) 115 b-e = Aristoteles fr.

44 Rose

---Mor. (Consol. ad Ux.) 611sq

Sextus Empiricus, Pyrr. Hyp. III, 231

Sophocles, Oed. Col. 1225

Stobaeus IV, 52, 22

Suidas archen men

(5) 宮内 璋・松本 七巻、岩波書店 1972, p. 525sq. = Plutarchus, Mor. (Consol 厚訳『断片集』「アリストテレス全集」一

ad Apoll.) 115b-e = Aristoteles fr. 44 Rose

- (6) loc. cit
- (~) KSA Bd. 3, S.408 (8) テオグニスのテクストは次のものを用いた。

ニーチェは「メガラのテオグニスについて」に於て、テオグニ

Douglas Young, Theognis, 2. Aufl. Leipzig 1971

Schlechta, C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München 1935 vgl. Friedrich Nietzsche, Werke und Briefe, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Werke Bd. 3, hrsg. Hans Joachim Mette/Karl

れていると述べている。

スのこの行では賎民が拍車と軛をあてがうべき動物として描か

(9) イーヴォ・フレンツェル 『ニーチェ』(川原栄峰訳)、

理想

- 社 1980, S.32f
- (의) Jean Carrière, Théognis, Paris 1975, S. 30

and particularly of his Connection with Greek Literature and A.H.J. Knight, Some Aspects of the Life and Work of Nietzsche Thought, Cambridge 1933. S.13f

- (□) KSA Bd. 4, 124f.
- (12) KSA Bd. 11, S.569, Juni-Juli 1885 36[43].
- (3) KSA Bd. 1, S. 338
- 15 (14) KSA Bd. 4, S. 305 KSA Bd. 5, S. 232
- Gesamtausgabe, Werke Bd. 3, hrsg. Hans Joachim Mette/Karl Friedrich Nietzsche, Werke und Briefe, Historisch-kritische

テオグニスとニーチェ

Schlechta, C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München 1935 ゆる畏敬の念や敬虔さや人間の間でのあらゆる正義や徳は彼ら 方をアガトス、即ち貴族、よい人々と呼んだ。神に対するあら S. 56:「テオグニスは……人々を以下の様に分類した。その一

(おのでら・ごう 南山大学南山宗教文化研究所研究員)濱神が彼らに宿っている。」(惨めな)と呼んだ。あらゆる道徳的な歪みやあらゆる不敬や

20